

檀信徒の在り方

森 近 静 子

信仰と私「お経の丑合」

お経とは縁のない私たち家族がお経との出会いをいただいたのは、今を遡ること六十年前、昭和二十九年、私が高校二年生、姉が国立女子大の二回生の九月三十日夕食後、家族での団欒の時のことでした。昨今と異なり自転車での配達で、一通の電報が届きました。「モウチヨウキル」と姉の女子大の寮長先生からの一報でした。私たち家族はあまりにも突然の事で呆然となりました。じっとしてもおられず、私が看病につき、父が挨拶にということになり、朝の準備にと部屋を出ようとしたとき父が寝てないのに夢を見た。「御免なさい、もう勉強やめた、やめた」と姉が言って姿が消えた。きっと悪いことが起こるのではと父が心配をしていると電話のベルがけたたましく鳴り父が受話器を取ると、女子大からの電話で「病状が急変したので、一刻も早く来てほしい」との内容でした。

両親には私を含め八人の女の子が授かっていました。一番末の妹は二歳でしたので、予定通り父と二人で翌朝一番の汽車で姉のもとへ急ぎました。

先生や同級生の方々が駅に迎えに来ておられました。足早に病院ではなく寮のほうに何も知らされないまま案内され、思いもよらない姉の変わり果てた姿に対面しました。父の顔、何とも言えない形相は今でもはっきり覚えています。

女子大で茶毘に伏して何とも言えない思いの中家路を急ぎました。それからの我が家は地獄でした。菩提寺の先々代のお上人様がみえ、「花より団子と申しますが、佛様にとつてもつとつとご馳走があります。それはお経です。」と親切に教えていただき、父は早速その日の夕刻から家族全員揃ってお勤めを始めました。長々となりましたが私たちが家族がお題目との出合いを頂いた始まりでした。それ以来六十年、私たち家族全員そろって朝夕、お経を唱える習慣は今日に至っております。

その後私も家族を持ち、一男二女の子供に恵まれました。お勤めをする中でのエピソードと申しまじょうか、一つ二つ紹介します。

一つは長男が三歳になったとき、近所の方がテレビ局に電話をされたらしくワイドショウ（桂小金治のアフタヌーンショウ）の企画室から日蓮宗のお経が読めるという三歳児をテレビ出演させてほしいとの依頼がありました。父も主人も「お経はテレビ出演のために勤行しているのではないはず」とテレビ局へは丁重にお断りいたしました。

また、長女が一番信仰心がないとよく主人は言っていました。長女は夜のお勤めの際、欲令衆が始まると次の日のテストの問題を読み上げ、そのことが連夜に至り、主人が不謹慎だと長女を仏間に残し十分ぐらい注意をしていました。それ以来そのような不始末がなくなり、その長女も今は日蓮宗ではないのですが重要文化財の二体の聖観音様のもとに嫁ぎました。

内孫は四人とも男の子です。四人がそろってお寺にお墓に参つてくれます。このことは他宗から嫁いできた嫁がりっぱであると思います。嫁が進んで子どもたちにお経を取り組ませ、四人にそれぞれ袋をもたせ、今流行のカードとかゲームなどではなく、お経本、数珠、ろうそく、線香、マッチの五つ道具とでも言いまじょうか、袋を入れて持たせてくれています。この親にしてこの子有りといまじょうか嫁に感謝しております。孫たちはその手にいつも袋を持ちお寺参り、お墓参りをしております。墓経を唱えている孫たちの姿を近くで墓参されている方々に誉められ、ま

た時にはおやつや飲み物を頂き、ある時はノートや鉛筆なども頂いて帰ってきます。先様にお礼を述べ、そんなときには孫をしつかり誉めて、その気持ち心持ちとなって益々その事を重んじ、信仰を続けていく氣力を養い、そうした気持ちを保ち貯えて頑張ってくれることでしょうか。こうして家族みんなできっかり一丸となって取り組むことが大切です。

話は変わりますが、先日、八月、九月に一件ずつ信仰について相談を受けました。

八月の一件は私の存じている方の御尊父様がなくなられ、どうしても菩提寺とのコミュニケーションがとれていないようで、いろいろ話しをさせてもらい、仏前にも参らせていただき、成仏されるようお題目の話をしていました。なくなられた方の遺言といわれ、なかなか私の思いが届かず、何度でも足を運びわかっていただくと頑張ってみようと思っています。

もう一件については面識のない方からでした。話を聞いていると相談の来られた方の弟さんが亡くなられ二七日の七日勤めの際、お上人様とトラブルが起きたらしく困っているとのことでした。そこで私はまず、御上人様と遺族の方との間に入って頂き、円満解決されることを勧めました。ところが、話をしてみましたが高かなか難しく、話が前に進まないとのことでした。かなり話がこじれているようでした。そこで私も勇気を出して私のようなもので良かったら、一度遺族の方とお会いし、信仰の話などしながら七七日のお勤めの話でもといたしました。今では親族の者達の意見も聞く耳を持ってくれないので、是非一度会ってみてほしいとの話になり、伺いました。ところが最初は、他宗に改宗とか、キリスト教の方が自分たちにわかりやすいとか、なかなか話が合わず、世間話に時間を費やししながら、まずなくなられた方に、成仏していただくことの大切さと、供養を行うことは貴男方遺族の皆様の役目でもあること。又、亡くなられたお父さんは日蓮宗を愛され、多くのお寺巡りもされていたことなどはなしが、いつの間にか日蓮宗の話にと発展し、少しずつ心変わりが見え、曲がりなりにもわかってもらい、「じゃー親族と家族の方々とで七七

日勤めを」と勧めましたところ、それなら自分たちもできると約束を取り付け、私も安堵いたしました。

改めてまた仏前にお参りすることを伝え、おそらく四九日までには菩提寺のお上人様ともコミュニケーションがとれることだと思えます。四九日の法要までにもう少し日数もありますし、私も何度か仏前にお参りし、もう少し話してみようと思っております。このような件につきましても全くの素人ですので、お上人様に相談をさせていただき乍お知恵を頂き、お上人様から授かった内容をしっかりと相手の方に伝え、理解を取り付け納得してもらおうべく努力しております。この件につきましてもきつと解っていただけの時が来ると信じております。

誰もが仏の子。一人ひとりの中に仏様がおられます。みんな仏の子「あなたも仏の子となれる人間です。」何のためにこの世に生を受けたのか、みんな気づきましよう。全ての人を敬って担行礼拝された、常不輕菩薩様の教えにあるように、しっかりと自分で生き方を考えることが大切です。そのためには家庭の中で、信仰を重んじ習慣付けることです。このことこそが家庭教育だと思っています。おそらく前述二件相談の内容からみると、家庭教育の不充分さから生じた案件ではないかとも思われます。家庭の中で仏様を大切に思う心が習慣付けられていれば、亡くなられた方への想いは違うのではないかと思えます。

家庭の中でもっと仏様を大切に思う心が習慣付けられ、その事を真剣に取り組み継続していくことが力となるでしょう。

ここで少し地元のことについて話をします。

広島県護法会の東部護法会では、様々な行事に取り生まれ、布教活動に努めておられます。

行事の一つに、年間五回に渡り東部信行講座が設けられ、広く檀信徒に呼びかけており、その内一回は講師先生を招かれています。先年も中尾堯先生による「日蓮と法華の名宝展」「法華経信仰と立正安国論」の講義をいただき、また昨年は兵庫県立大学岡田真美子先生の、「改転の女人成佛と龍女成佛」「法護の訳経群」を中心に解りやすくお

話を頂きました。

また、今年五月には岡山県妙楽寺北山孝治先生による「いのちに合掌」「命の役割」と題されまして、常不軽菩薩品に説かれる担行礼拝の菩薩道の実践と、宮沢賢治の法華文学を勉強させていただきました。

勿論、地元の専任布教師の諸先生方の熱心な解りやすく楽しい信行講座での勉強もさせていただいております。

菩提寺では檀信徒たちに答えるべく様々な行事を企画立案され、以前からの行事については残すべき内容は残し、新しい方法を付け加え、少しでも多勢のお参りを頂き、檀信徒に行事の浸透に努めておられます。

一例として紹介しますと、毎月一回二十八日に旭講、盛運祈願講においても、午後二時より一日一回の講座を現お上人様になられてから午後二時からと午後七時からの二回盛運祈願講を行われるようになり、お上人様ご夫妻におかれましては二倍の労力かと思われます。しかし、成果は三倍いやそれ以上だと思えます。

また、新しい行事を布教活動の一環として考えられ、一人でも多くのお寺へのお参りを望まれ、最近では新しい行事の中に、地域の住民との関わりを大切にし、地域のコミュニティとしての役割を果たしておられ、老若男女交えての除夜の鐘・新年法要、法話、子どもたちも多勢集まり、年々、参加、お参りの盛り上がりを見えています。種々な行事の内容はさることながら、努力されるお上人様夫妻の二人三脚のお姿には頭が下がります。どんなにお上人様が一生懸命になられても檀信徒の心がしつかり菩提寺に根付いていくこと、このことが一番大事なことだと思えます。

ここでもう一度檀信徒のみなさんに振り返っていただきたいと思えます。信仰は打ち上げ花火と化してはいけません。そのためには経験を積みながらその経験を生かし、習慣付け、継続していくことだと思えます。若い者から子どもに、こどもから孫に、孫から曾孫に代々しつかりとした絆で結び、結ばれたことを伝承していくことこそ、意義深いことだと思われます。

檀信徒一人ひとりの信仰により菩提寺も栄え、隆盛となり、檀信徒にも幸せが運ばれることと思えます。今、世間

で取り沙汰されている頭を悩ます「三離現象」。いつしか薄らぎなくなってゆくことと思われます。このことを念じて止みません。

無意識のうち習慣付けられ、身に付いたままのお題目の中で、こんなに深い意味を持つ法華経の有り難さに感謝申し上げます。

護法会、その他色々のお世話、お役を務められながら布教活動の中で、手を変え、品を変えられ檀信徒を何時も導いてくださるお上人様のお姿お心に感謝申し上げます。

私とお経との出会いは一期一会であります。最初の出会いは命をもって教えてくれた姉ではあったのかもしれませんが。お経は心であり、生き方の常夜灯であり、一たびの出会いを持って未熟な心を育てていただいていると思っております。そして、お経は様々な方々との出会いをいただく中でともに歩んで十一月五日で三回忌を迎える主人との歴史ではなかったのかと仏様になってまでも私を導いてくれているのではないかと思う毎日です。

合掌